

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13385

研究課題名(和文)江戸期文芸を通じた食文化研究 「食」の現実と文芸化をめぐって

研究課題名(英文) Investigation of Food Culture through Japanese Literature: How did people represent food in literary works in early modern Japan?

研究代表者

畑 有紀 (Hata, Yuki)

新潟大学・日本酒学センター・特任助教

研究者番号：60768422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は江戸期の文芸、特に草双紙や浮世絵版画といった庶民向け文芸を題材とし、江戸期における「食」の文芸表現の様相を検討するものである。室町期以前はほとんど描かれることのなかった「食」がいかに江戸期に描かれるようになったのか、その文化的変遷を考察する。特に本研究では、料理書、本草書などを用いて、当時の人々の知識や認識に基づきこれらの文芸を読み直すことで、文芸に表現される「食」と現実の生活の中での「食」は同一視できないものであり、「食」を表象文化として再定義する必要性を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸期の「食」を描く文芸は従来、単なる滑稽文学・文芸と捉えられ、十分な検討がなされてこなかった。しかし本研究により、文芸中に描かれた「食」と実際の生活の中での「食」との間には相違があることを示し、「食」を表象文化として捉え直す必要性を提起できた。また、江戸文化がなぜこれほど「食」を表現したのか、江戸文化を「食」から研究する可能性を指摘するに至った。さらに、現在まで数多く遺されていながらもそれぞれ孤立した状態にある江戸期の「食」関係資料について、それらを有機的に結び付け行う食文化研究の方法論を提示した。

研究成果の概要(英文)：This study examines how food was represented in the literature and arts of early modern Japan, mainly by analyzing literary works for common people, such as kusa-zoshi (illustrated storybooks) and ukiyo-e. People often depicted food in literary works in the early modern period, though few such pieces existed before the medieval period. So I discuss how and why people frequently represented food in the 18th and 19th centuries through a perspective of cultural history. In this study, I interpret literary works from people's points of view of this period, checking against cookbooks, herbal books, and so on. This shows two points below:
1) Previous research sometimes treats these works as reflections of real life, like pictures. But we should not equate food depicted in them with that in people's real life.
2) We tend to consider food as a part of our livelihood culture. However, there is room for further research about food; we can re-examine it in terms of representational culture.

研究分野：日本文学

キーワード：近世日本 食文化 文芸表現 草双紙 擬人化 料理 本草学

1. 研究開始当初の背景

江戸期の「食」をめぐる研究は、当時の食材や調理法を明らかにすることを中心に進められてきた。主に料理書や日記を用い、人々が何をどのように食してきたかという、生活の一部としての「食」の解明が重視されてきたと言える。

ただしこの時代の「食」については、料理書だけでなく、類書、本草書、儀礼書、外食案内書などの実用書から、生産や輸送の記録、文芸に至るまで、関連する文献が豊富に遺されている。とりわけ草双紙や浮世絵版画には、調理や食事の場面が描かれるだけでなく、飲食物を個性あるキャラクターとして擬人化し、その争いや恋を描くなど、「食」を主体とする作も複数生まれているほどである。

しかし、このような「食」を描く文芸は、文学や芸術学の分野では単なる滑稽文学・滑稽画として等閑視されてきた。そのため、これらは十分な検証を経ぬまま、実際の食生活を映した歴史資料のように用いられることすらある。つまり、文芸として表象される「食」と実生活の「食」とが区別されていなかったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、草双紙や浮世絵版画を通じ『食』を表象すること」を食文化の一側面として捉え、江戸の文芸・文化の創出を顧みることにある。つまり、上記の文芸に対して料理書、本草書などといった同時代の「食」関連資料を用いて注釈付けを行い、総合的に読み解くことによって、現実の生活の中の「食」と表現対象としての「食」との間の隔たりを指摘し、「食」を表象文化として再定義することで、それらを育んだ江戸文化を捉え直すものである。

また、このような研究手法を用いることは、従来の研究では相互の関連性が希薄であった「食」関連資料を結びつけることにも繋がる。

3. 研究の方法

上述したように本研究は、江戸期の「食」を描く文芸を、料理書、本草書など、同時代の多様な「食」関係資料を用いて注釈付けを行い、当時の「食」をめぐる社会の中でこれらを読み解くものである。本研究では特に、江戸中後期の庶民向け文芸である草双紙（赤本・黒本・黄表紙・合巻）と浮世絵版画を取り上げて検討を行う。これらはすべて、絵入りの文芸であることから、図像を含めた考察を行うことで、文字だけに囚われない「食」のイメージの解明を目指す。

具体的な手順は以下の通りである。該当する「食」を描く文芸を調査・翻刻したのち、汎用可能な基礎資料としてまとめる。そして描かれた食物や料理が、同時代にどのようなものとして位置づけられていたか、特に料理書や本草書の記述と照らし合わせることで分析を行う。最後に、このような文芸が生まれた文化的背景について、食生活だけでなく、前後に連なる文芸史、文化史の観点から考察する。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下4点に大別される。

酒と餅（菓子）の優劣争い

上記した庶民向け文芸のうち、特に「食」との密接な関係を持つ黄表紙について、食物を擬人化する作27点を抽出し、調査・翻刻を行った。黄表紙に飲食物が擬人化される際には、それらの争いや戦が主題とされることが多く、中でも酒と餅（菓子）との争い、精進物と魚類との争いなどが多いことを指摘した。このうち、酒と餅の争いについては、同様の画題を持つ浮世絵版画も複数確認されることから、作中の酒や餅を抽出、同時代の料理書、生産・輸送の記録などと対照することで、「食」をめぐる文芸と社会の関係を論じた。

また、上記した江戸期の文芸に先行する作として、室町期の御伽草子『精進魚類物語』も取り上げた。擬人名に着目した注釈作業を行ったのち、江戸期への「食」を表現する文化の継承についても考察した。

「食」の表現における酒の位置付け

上記の分析・検討を踏まえ、黄表紙に表現された飲食物の中で、酒が有する特異性を明らかにした。黄表紙に擬人化される飲食物は、庶民の食生活の中で一般的であったもので、諺や著名人の名になぞらえたものが主であるが、とりわけ酒にはブランド性が強く反映されている点を指摘するに至った。

なお、酒の分析を行う上では「浦島太郎」や『通俗三国志』など先行する文芸のパロディ作も対象とし、江戸後期の文芸が酒をいかに表現したかを広く検討した。

赤本・黒本に描かれる調理・酒宴・婚礼

調理・酒宴・婚礼など、「食」に関わる場面を描いた赤本・黒本 56 作を取り上げ、描かれた食物と場面について検討を行った。特に、婚礼に際しての酒宴を描く「嫁入り物」について、食材と調理方法、提供される料理を分類した上で、同時代に刊行された女子用往来の記述や挿絵との対照を行い、女子教育との関連の中で論じる可能性を見出した。

文芸に表現される「食」の教訓

当時の人々にとっての個々の飲食物のみならず、広く「食」の位置付けを把握するため、大食を戒める錦絵「飲食養生鑑」を取り上げた。これらの画に表現された「食」に関わる臓器の医学知識について、その典拠を明らかにした上で、画中には当時の医学知識と相反する記述があることを指摘するなど、医学的な観点から「食」をめぐる文芸と実社会との間にある乖離を確認した。

他方、幕末の麻疹流行時に生まれた錦絵「麻疹禁忌荒増」など、当時の本草学の知識、言い換えれば飲食物の効能や害毒までもが、文芸として表現された事実も明らかにできた。

以上のような研究内容を通じ、従来等閑視されてきた「食」を描く文芸のうち、江戸中後期の作を中心に検討を加えることで、当時の「食」を表現する文化の在り方を考察することができた。なお、本研究で分析対象とした各資料を用い、国際的な成果発表や共同教育活動を展開することができたことは、当初の計画を上回る収穫であった。カンピーナス州立大学（カンピーナス、ブラジル）、アマゾナス連邦大学（マナウス、ブラジル）、日仏大学会館（ストラスブール、フランス）での発表のほか、ヘルシンキ大学（フィンランド）で行った講義内容が現地語で刊行されるなど、海外での日本教育・研究の発展にも寄与できたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻 250
2. 論文標題 黄表紙に擬人化される酒	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 酔いの文化史（アジア遊学）	6. 最初と最後の頁 112 - 129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻
2. 論文標題 文久二年（一八六二）の麻疹流行と食物 麻疹絵が示す食養生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和食文芸入門	6. 最初と最後の頁 259 - 276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻 36
2. 論文標題 国立国会図書館所蔵『福德三年酒』翻刻と語釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 酒史研究	6. 最初と最後の頁 38 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻 17
2. 論文標題 和歌形式の食物本草書の変遷 『永代重宝記宝蔵』所収「食物本草要歌」翻刻と解題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 食文化研究	6. 最初と最後の頁 100 - 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuki Hata, Rie Fuse(tris.), Yoshiko Osamitsu(tris.), Laura Kentta(tris.), Mika Heiskanen(tris.), Santtu Repo(tris.)	4. 巻 2/2021
2. 論文標題 Johdanto kuzushiji -kirjoitukseen: japanilaisten kirjoitusmerkkien historiasta	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tomo	6. 最初と最後の頁 9 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuki Hata, Rie Fuse(tris.), Yoshiko Osamitsu(tris.), Laura Kentta(tris.), Mika Heiskanen(tris.), Santtu Repo(tris.)	4. 巻 1-2021
2. 論文標題 Johdanto kuzushiji	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tomo	6. 最初と最後の頁 9 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻 6
2. 論文標題 国立国会図書館所蔵『通俗三吞志』翻刻と語釈	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論集 日韓学术交流会 : 言語文化を巡って	6. 最初と最後の頁 62 - 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑 有紀	4. 巻 37
2. 論文標題 62 - 40	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 酒史研究	6. 最初と最後の頁 10 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 総合討議・島原図書館松平文庫本『精進魚類物語』を中心に（パネリスト）
3. 学会等名 ワークショップ『精進魚類物語』を読む
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 黄表紙の中の擬人化される食べ物 (A personificacao dos alimentos nos Capa Amarela (kibyoshi))
3. 学会等名 第12回ブラジル日本研究国際学会・第25回全伯日本語日本文学日本文化大学教員学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 江戸の麻疹流行と食べもの
3. 学会等名 連続文化セミナー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HATA Yuki
2. 発表標題 The Personifications of Foods in the Late Edo Period : Why do the foods in Kibyoshi fight among themselves?
3. 学会等名 JSPS-MUFJ Seminar #215（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 「飲食養生鑑」・「房事養生鑑」に表現される身体
3. 学会等名 国際研究集会「日本文化における身体」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 「飲食養生鑑」・「房事養生鑑」の教訓性
3. 学会等名 科研費基盤(B)・頭脳循環プログラムによる合同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 酒と菓子の優劣争い「酒餅論」と江戸の酒 擬人化される酒をめぐる
3. 学会等名 日本酒学研究会設立総会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 古典文芸に見る酒の文化
3. 学会等名 第3回日本酒学シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 描き、楽しむ酒 古典文芸から読み解く酒の文化
3. 学会等名 新潟県醸造試験場創立91周年記念式典 特別講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 江戸の物語の中の食と酒 飲食物の擬人化表現をめぐって
3. 学会等名 研究会 日本酒と日本料理の過去・現在・未来を考える（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 畑 有紀
2. 発表標題 黄表紙にみる飲食物の擬人化 酒の表現方法をめぐって
3. 学会等名 第7回韓日学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------